平成 28 年度　第 1 回

宇治田原町総合教育会議議事録

宇治田原町総合教育会議議事録

招集年月日　平成２９年２月１７日（金）午後１時３０分開会

招 集 場 所　宇治田原町総合文化センター　３階　研修室１

議 事 日 程

１．開会

２．町長あいさつ

３．委員紹介

４．協議事項

（１）小中一貫教育について

（２）意見交換

出席委員

町長	西　谷　信　夫
教育長	増　田　千　秋
教育長職務代理者	田　中　典　夫
教育委員	山　本　　薫
教育委員	大　嶋　良　孝
教育委員	杉　野　三千代

職務のため出席した者の職氏名

総務部長	久野村　観　光
教育部長	黒　川　　剛
総務課長	清　水　　清
総務課庶務人事係長	中　村　浩　二
総務課主事	中　井　春　花
学校教育課課長補佐	池　尻　一　宏
学校教育課教育総務係長	難　波　親　夫

会議傍聴者　１名

○清水課長　それでは、皆さん、改めましてこんにちは。

定刻となりましたので、平成２９年度第１回目宇治田原町総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます町総務部総務課長の清水でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

本会議につきましては、宇治田原町審議会等の活性化指針に基づき公開としており、事前に会議開催日時を町ホームページにおいて告知の上、傍聴を希望する方に対して傍聴を認めることとしております。

傍聴者におかれましては、お手元に配付させていただいております宇治田原町審議会等傍聴要領に従い、適切な会議運営にご協力いただきますようよろしくお願いを申し上げます。

なお、本会議につきましては、後ほどご説明させていただきますが、前年同様、会議録を作成し、町ホームページにて公表することを予定しております。

また、報道機関による取材等を受けた場合には、会議結果、内容等について情報を提供することとしておりますので、各位におかれましてはご了承いただきますようよろしくお願いを申し上げます。

本日の会議は、お手元にお配りしております次第に従って進めてまいりたいと考えております。

まず、開会に当たりまして西谷町長より挨拶をお願いしたいと思います。

○西谷町長　皆さん、改めましてこんにちは。

先日来大変寒気が来ております。全国的に大雪になっておりまして、昨日、おとといぐらいから少し気温が上がってきて、大変ちょっと春を思わせるような陽気になってまいりましたけども、また温度が上がることによって雪の事故があるかということで、なかなか難しいところであるなというふうに感じておるところでございます。

本日は、教育委員の皆さんにおかれましては、大変公私ご多用のところ総合教育会議にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

また、平素は本町行政の推進に、とりわけ教育行政に何かとご理解、ご協力賜っておりますことを、この場をお借りいたしまして厚くお礼を申し上げる次第でございます。

また、昨年度開催いたしましたこの会議におきまして、宇治田原町第５次まちづくり総合計画に掲げます子育てと学びを応援するまちづくりに則し、本町の教育行政を推進するための基本的な計画として、教育、学術及び文化の振興に関する施策の取り組み方

針を定める教育大綱を、人がつながる未来につながるまちぐるみの教育を基本理念に、教育委員会の皆さんのご意見を賜る中で策定することができたところでございます。

また、本日におきましても、総合教育会議の設置の趣旨でもあります、町長部局、首長と、また教育委員会の意思疎通という、そういうことによりまして、今抱えております教育の課題や、また推進すべき教育の施策の方向性等を共有する中で、より一層連携を深めながら本町の教育行政を推進してまいりたいというふうに考えておりまして、そういうことでは、この会議は大変貴重な会議であろうというふうに思っておるところでございまして、この会議が実りある会議になりますことを、よろしくお願い申し上げますとともに、皆様には忌憚のないご意見を賜りますように心からお願い申し上げまして、総合教育会議開会に当たりましてのご挨拶といたします。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

○清水課長　ありがとうございました。

それでは、本日配付しております資料のご確認をお願いしたいと思います。

まず、次第が１枚ございます。次に、出席者名簿があり、そして、宇治田原町教育委員会定例会における小中学校の施設のあり方に関する案件が１枚、学校施設のあり方について、学校教育的視点からの考察が一つ、それから宇治田原町児童数生徒数見込、平成２９年１月１日現在、これが１枚、合計５枚でございます。

以上でございます。資料のほうはよろしいでしょうか。

それでは、続きまして、本日の出席者の皆様のご紹介をさせていただきます。お手元の名簿によりお名前を紹介させていただきたいと思います。

まず、先ほどご挨拶を申し上げました西谷町長でございます。

○西谷町長　どうぞよろしくお願いします。

○清水課長　続きまして、増田教育長でございます。

○増田教育長　どうぞよろしくお願いいたします。

○清水課長　続きまして、教育長職務代理者の田中典夫様でございます。

○田中職務代理　よろしくお願いします。

○清水課長　続きまして、教育委員の山本薫様でございます。

○山本委員　どうぞよろしくお願いします。

○清水課長　続きまして、教育委員の大嶋良孝様でございます。

○大嶋委員　よろしくお願いいたします。

○清水課長　続きまして、教育委員の杉野三千代様でございます。

○杉野委員　よろしくお願いいたします。

○清水課長　次に、事務局側を紹介いたします。

　まず、私の隣、総務部長の久野村でございます。

○久野村総務部長　本日はご苦労さまでございます。よろしくお願いいたします。

○清水課長　教育部長の黒川でございます。

○黒川教育部長　どうぞよろしくお願いします。

○清水課長　後ろにいきまして、総務課庶務人事係長の中村でございます。

○中村係長　どうぞよろしくお願いいたします。

○清水課長　その隣、総務課主事の中井でございます。

○中井主事　よろしくお願いいたします。

○清水課長　学校教育課課長補佐の池尻でございます。

○池尻課長補佐　よろしくお願いいたします。

○清水課長　学校教育課教育総務係長の難波でございます。

○難波係長　よろしくお願いします。

○清水課長　申しおくれましたが、私、総務課長の清水でございます。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

　なお、社会教育課長の岩井につきましては、本日ことぶき大学を開催しており、そちらのほうに出席しておりますことから、本日は欠席させていただいていることを報告させていただきます。

　それでは、早速協議事項に入ってまいりたいと思いますが、議事の進行につきましては、宇治田原町総合教育会議運営要綱第３条の規定に基づきまして、西谷町長に進行をお願いしたいと思います。

　それでは、西谷町長、よろしくお願いをいたします。

○西谷町長　それでは、本日の協議事項につきましてお配りしております資料に基づいて、まず１番目には小中一貫教育について、それで、２番目には意見交換ということでございますので、よろしくお願いしたいと思います。

　まず、１つ目の協議事項につきまして、小中一貫教育について事務局から説明を願いたいと思います。

○増田教育長　この間の小中一貫教育につきましての概要を先に報告させていただきます。

　平成２４年度には、小中連携一貫教育のあり方検討会議が４回開催され、本町における小中一貫教育の推進の方向性を指し示し、ふるさと宇治田原を愛し、未来に羽ばたく

子どもたちの育成を目指して学区で答申をされました。学園構想につきましては、今後の取り組みが進む中で、宇治田原町民の総意として、３校の一体性をより強固にし小中一貫教育をさらに充実して推進していく上で、町教育行政の主導と３校の連携のもと、小中一貫教育校宇治田原町立〇〇学園構想を提示と、方向性を示されました。

そのことを踏まえ、現在、愛称を募集し、平成２９年度当初からの学園発足に向けて取り組みを進めているところでございます。

また、施設のあり方につきましては、将来的には現行の２小学校の形態を維持し続けるのか、新たに核となる学校を設ける施設一体型の小中一貫教育校の形態をとるのかの選択が必要な時期が来ると思われるとの課題を提示されました。本町の小中一貫教育の進展、また、人数動向等を勘案するとき、施設のあり方について一定の方向づけをする時期に来ていると考えているところです。

続いて、教育委員会での小中一貫教育についての研究、協議の経過を再度踏まえたいと存じます。

小中一貫教育に係る施設のあり方については、総合的な見地から、教育委員会において研究、協議を主体的に進めていくことが平成２６年８月に了承されところです。その後、９月には、これまでの経過確認と施設のあり方について、将来の児童生徒数、社会情勢、国の動き等を見ながら、教育的観点から継続的に研究、検討することが確認されました。

平成２７年１月には、国の中央教育審議会の答申を踏まえ、制度化を目指す小中一貫教育の制度化設計について研修を行うとともに、６月には、国の制度化に係り、１に、義務教育学校か小中一貫型小中学校か、改正学校教育法に沿った本町においての学校制度組織のあり方についての検討、２に、小中一貫教育を推進するための施設のあり方による効果及び課題、３に、学校適正規模を踏まえ、今後の児童生徒数を見据えた効果と課題の整理を行ったところでございます。

平成２８年１月には、第１０回小中一貫教育全国サミットイン奈良に、全ての教育委員が出席して、小中一貫教育について理解を深めました。施設一体型、１中２小連携型、１中１小連携型のそれぞれの取り組みを参観することにより、施設形態により教育効果について学ぶことができました。

２月には、小中一貫教育を推進するに当たり、学園構想について協議しました。１に、平成２６年１０月以来の小中一貫教育推進協議会を平成２８年度に再開、２に、平成２８年度中に学園の愛称を募集して決定し、平成２９年度からその名称のもとで本町の

小中一貫教育を推進する、３に、学園の組織、運営体制については学校を中心として検討していただく、４に、学園と家庭、地域とを結ぶ組織については、小中一貫教育推進協議会において協議していただく等の学園構想に係る今後の方向性について協議しました。

７月には、文部科学省の次世代の学校・地域創生プラン、通称、馳プランについて研修をしました。１０月には、施設のあり方についての協議の方向性について確認をいたしました。１２月には、小中一貫教育関係と施設形態による教育効果の視点から協議をいたしました。

平成２９年１月には、小中一貫教育関係による教育効果の視点からの施設のあり方については、隣接型を含む一体型施設のほうが効果が期待できる、より望ましいと言えるのではないかとの小まとめをしたところです。その後、今後の児童生徒数の推移及び文部科学省の公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引を踏まえ、学校適正規模の施設形態による教育効果の視点から協議をいたしました。

今後の定例会において、学校適正規模による教育的効果の視点からの施設のあり方について小まとめを行い、さらに、それぞれの教育的効果を踏まえつつ、総合的な視点から判断を行う中で、今後、いずれの形態とすべきかの方向づけをしてまいりたいと考えております。教育委員会といたしましては、本町の将来の教育のあり方を見据え、子どもたちのために、また、子どもを育てる教育環境として一番よいのはどれかという教育的効果の視点を第一にして検討を進めているところであります。

町長におかれましても、まちづくりの視点からのご意見をお伺いしたいと考えているところです。

○黒川教育部長　私のほうから昨今におけます協議の状況につきまして、ご説明を申し上げます。

お手元のほうに配付している資料も、併せてご覧いただけるかと思っております。

施設のあり方につきましては、昨年９月議会におけます審議、議論を経まして、西谷町長のほうが、諸課題を整理する中で一定の方向性を導き出せるよう教育委員会と精力的に協議、調整を行ってまいりたいと考えておりますと、表明されているところでございます。

また、昨年、１１月には、大嶋委員が新たに教育委員に就任していただき、１２月には杉野委員の就任を迎えまして、現教育委員会の体制となったところでございます。現体制となりました１２月２１日に開催いたしました平成２８年第１１回の教育委員会定

例会、付議案件に小中一貫教育について提案させていただき、平成２４年度に取り組みいたしました小中連携一貫教育のあり方検討会議により小中一貫教育を進めていく指針をまとめたこと、学園構想を進めていくことをまとめるとともに、施設のあり方については、将来の宇治田原町を担う子どもたちを地域を挙げて育てていくという理念にかかわる方向を打ち出す必要があることを踏まえまして、教育的観点から検討を開始したところでございます。

お手元の「宇治田原町教育委員会定例会における小中学校の施設のあり方に関する案件」と題した資料がございますが、丸で１番目に書いてございます小中一貫教育関係の視点は、昨年１２月２１日の議論と、今年に入りましての１月２４日に取りまとめの確認を行ったところでございます。この後ご説明申し上げますが、学校施設のあり方について（教育的視点からの考察）として小まとめを行っているところでございます。

次の、丸２番目、児童数関係の視点につきましては、お手元に資料として配付しております児童数生徒数見込みの表と、教育委員会では配付しておりますけれども、平成２７年１月に文部科学省が提示しております「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を参考資料として１月２４日の教育委員会で議論を始めているところでございます。

取りまとめができる段階まで、その際の委員会では議論を進めることができておらず、今月２２日に予定しております教育委員会でさらに議論を深めていくこととしております。

そのほか、地域関係の視点、財政関係の視点につきましても、今後意見交換を行っていくこととしておりますけれども、地域コミュニティーや財政負担などの視点につきましては、町長部局との意思疎通を十分行う必要があるというふうに考えているところでございます。教育委員会での議論を深めるためにも、町長から希望的な考えについてお話をいただければ幸いというふうに考えているところでございます。

続きまして、２番、学校施設のあり方について（教育的視点からの考察）についてご説明を申し上げます。

教育的視点からの検討を行っておりますが、現在、小中一貫教育として取り組んでおります中学教員の小学校への授業をより進めやすくするためにはという視点では、現状の分離型だと、学校が遠く離れていれば連絡もとりにくく、移動にも時間がかかるが、一体型・隣接型になれば、そのような課題は解消され、教育的に子どもにとっても実施しやすくなる、小小・小中教育課程等の統一の視点ということでは、小中においては特

に施設形態による優劣はない、小小については、小学校同士ですね、につきましては、現在は分離型の２校であるので、違いがあるけれども、小学校が一つになる一体型になりますと、小学校間という概念自体がなくなるということでございます。

したがって、現在実施している各種授業、行事も同様であり、それぞれの教科書会社等も、小中でどういうように履修していくのかというような表を作成している、ある程度学校に委ねられている総合的な学習の時間、地域学習や人権学習といったものでございますが、につきましては、統一されたカリキュラムがあるほうがよいということで作成をしております。これらを実施していくに当たっては、一体型のほうが進みやすいという形で取りまとめを行っております。特に、地域のことにつきましては、小学校のときから町全体が対象となり、教育的にも子どもにとって効果が期待できる。

次に、小中の滑らかな接続といった視点では、全児童が在籍する一体型にするほうが滑らかに接続でき、環境の変化も少なくなる、教育的に指導等も行いやすく、子どもにとっても適応しやすくなると考えられるというまとめでございます。

教師力の向上、学力向上、規範意識の向上といった視点におきましては、教師力の向上では、教師同士の信頼関係を築き上げることが重要であり、分離型より一体型にした場合のほうが同じベクトル、同じ方針で授業を展開でき、教師の信頼関係も築くことができ、効果が上がるというふうに考えます。

教育活動につきましては、児童生徒の実態に合わせて行っていくので、一体型になればより把握しやすくなり、中学入学後も指導しやすくなり、一体型・隣接型になると、小学校間という概念自体がなくなり、子どもにとって小学校から学習面及び生活面の形態の変化が少なく、学力の向上、よりよい生活態度の確立が期待できる。

以上のことから、小中一貫教育関係の視点というところでは、施設のあり方につきましては一体型・隣接型のほうが効果が期待できる、より望ましいという小まとめをしているところでございます。

先ほども教育長のほうからありましたけれども、今後、他の視点、側面からも協議をまとめまして、教育委員会として施設のあり方についての方向性をまとめてまいりたいというふうに考えているところでございます。

以上でご報告を申し上げます。

○西谷町長　ただいま教育長のほうから概要をお聞きし、また、黒川部長のほうから小中一貫についての検討等々説明がございました。

ただいまの説明につきまして、委員の方々からご意見を賜りたいと思います。

○田中職務代理　出にくいようですから、きっかけになればと申しますが、小中一貫教育に取り組んで、昨年度までは、分離型で進めているのやなという共通理解のもとでやってきました。施設については、とりあえずよけておこうという形できたように思いますので、それについての検討というのはほとんどできていなかった状態かなと、私は受け取りました。

それが、この経過の説明にもありましたように、１０月に施設のあり方について協議の方向を確認し、１２月に一貫教育ではどうかという説明をし、１月に適正規模の観点で話を進めてきたところですけれども、内容がかなり影響が大きいにもかかわらず、若干検討期間としては短いのかなと、私は思っております。今回のほかに、今月２２日に再度検討する機会を持つということなんですが、３月までに一定の方向性を教育委員会として持つということに対して懸念しているところがあるというのが実情というのが一つです。

要するに、もう少し深く検討できる時間がなかったかなという事です。

ついでもう幾つか言っておきますけども、二つ目は、小中一貫教育関係で言いますと、これも、部長のほうから言われましたけれども、近いほうが一貫教育を進めるのはスムーズであるというのはもう自明かなと思っておりますので、一体型か隣接型にするのがより望ましいというのは、論を待つことはないと思います。

ただ、施設を１校新しくつくるということに費やす労力というんですか、費用とか期間とかいろんなものを合わせた費やす労力が、一貫教育を進めることの成果との見合いで、費用対効果で本当にぜひやらなければ子どもたちにとって不幸なのかという比較をという観点では、私はやや物足りないと、やったほうがいいけど、何としてもやらないと子どもたちにとって十分でないとは言いかねるんじゃないかなという考えを、一貫教育の話の中でも思いました。

以上です。

○西谷町長　ありがとうございます。

今、田中先生のほうから、もう少し方向性を出すのは時間がかかるということで、また、施設が近いところにあるのは、これはもう言うまでもないというご意見でございます。一体にするか隣接にするか、その辺が一番いいであろうかというご意見をいただきました。

そういった中で、費用対効果について、そこまでの効果が出るのかというところもどうだかなというふうに分析をいただいております。小学校と中学校が隣接している、ま

た、一体化しているという中では、確かに一種の効果が出るだろうというふうでございます。そういった中での、施設の建設を新しくするとかいう中での費用対効果ということについては、十分な検討をしなければならないだろうかというふうには思います。

ほかにご意見、また、今、田中先生がおっしゃったことにつきまして何か考えがあればお願いしたいと思います。

○大嶋委員　まだ検討を始めるところで、児童数との関係というところであって、若干その辺のところの表を見ながらというようなところではあるわけですけども、一度その表を見てもらったらと思うんですが、今年、２８年度に生まれた零歳児といいますか、その子らが小学校、中学校になったときどういうふうになっていくのかを見てもらったらと思いますけど、ほとんどが１クラスという単位で推移していくと。

僕はどうしても中学校の部分での立場で見るときに、入学した子が６年間同じクラスで生活をしていくことについて、人としての成長の中で失うものが結構多くある、その時期につけさせてあげなければいけないものというのがあるんではないかなというふうに感じております。

中学校卒業すると、子どもたちは宇治田原町を出て、近隣の高校へと進む形になるわけですけど、二十数年間の維孝館の子どもたちを見ていても、多い生徒数やなと言われたときでも、子どもたちは広い高校のところへ行って戸惑いを受けることになります。そうすると、少なくなればなるほど、その戸惑いを少なくしていくような教育活動も本来必要ではないかなと。

今現在、総合的な学習等で、ふるさとを愛するような、そういうような教育活動を取り入れながら、誇りを持って高校とか大学に進めるような形での部分をやり始めているところだと思います。そういうふうに考えたならば、やっぱり大きな集団の中で教育活動をし、さらに、中学校を卒業したときにもう少し大きなところへ行くわけですから、宇治田原ならではの教育活動が必要になってくるんではないかなと、僕は思います。

そうしないと、これも以前言わせてもらいましたけど、維孝館にかわってきた時に、中学校を卒業して途中で中退をしたりする生徒が非常に多いなという実感をしました。そういうようなことも、また再来と言えばおかしいですけども、そういうことが起こり得るのが、非常に教育者としてはつらい部分があるんです。やっぱり卒業して生き生きと学習し、生活していく、そして、ふるさと宇治田原を愛して地元に帰ってくる、または、愛しながらいろんなところで活躍していくというような形になっていけたらなという思いが強いです。

だから、そうするためにも、少ない人数で６年間過ごすのは、いろんな教育活動の工夫を、子どもたちはできません、大人が計画的にしてあげるべきだと。そういう面で言うと、大きく変わる節目やと思いますので、その辺のところは、やっぱり僕ら教育委員も含めて、宇治田原町全体の大人の責任の中で進めていくべきかなというふうに思っているところです。

以上です。

○西谷町長　小学校６年間を１クラスでずっと６年間というと、例えば、クラス替えが定期的にできるという点で、６年間過ごす。中学へ行ったら一緒なんですね、今の両校が一つになっていくわけです。その手前の６年間がそういう中で子どもが育まれていくということがやっぱり大事やというような、そういうことですね。

中学校の３年間だけでは短いです。１クラスはかなり無理があるなと。

○西谷町長　中学校も１クラスになるの。

○増田教育長　いえいえ、中学校は。小学校は現在のままであれば両校とも。

○西谷町長　だからそれはわかっています。せやのうて、中学校では一応複数クラスとなるわけでしょう。それはもう３年間しかないという意味で、やっぱり小学校１年から６年までの、そういうある程度の規模の中でのほうが育まれていくということが、中学校になってもプラスになるし、また逆に、そこから今度、広い高校の世界へ行っても、やっぱり小学校のときからずっとそういう形で育っているという部分で、やっぱり前よりは違うという、そういうふうな意味ですね。

○大嶋委員　ちょうど、私も、前いたところが１中１小学校です。となってきますと、中学校に入学したときの部分というのが、小学校との連携を十二分に図れます。それから、人間関係もできて、２クラスでしたんで、どういうふうにしていくかという中ですと、人と人との関係はできていますので、次のステップですね、中学校の教育課程の部分もそうですし、次に進む高校というのを視野に入れながら教育活動ができる。

それで、幾つかが集まってくると、１学期間または半年ぐらい、子どもらがなじむといったらおかしいですけども、慣れてくるまでに時間を要するということで、よく言われますけど、中学生の反抗期だったり、そういうふうなところをどういうふうに小さくしてあげるのかという中でいきますと、そういうところでのトラブル、お互いにそれぞれの子ども同士の性格を知っていく中での反抗期とかが出てきた場合には、子ども同士がわかり合えていますんで、そうむちゃなことはないですが、集まってきた中で、たまたまそういうふうな時期的に早いと大きなトラブルのもとになっていきます。

今、誰々君反抗期やけど、あの人はこんないいところがあるというのを知った上で来ますので、そうすると関わり方が変わってくるというふうには、たまたまそういうふうな２つの学校を経験したというところがありますけど、そうすると、ちょうど規模的にも、前のところは２クラス、ここへ来ても２クラスということは、小学校も２クラスというようなところで言うと、非常に教育活動としては一本積み上げていけるなという。

そういう点で、集まってきていろんな気苦労というか、子どもらがなじむまでの時間というのがあるし、それと、やっぱりいろんな行事もあります。今はすり合わせしながら漏れがないようにしていますけど、そういうようなものも、やっぱり違いというのがあって、ある学校はこのことをやっていない、ある学校はやっているというようなところがあると、中学校としては、そしたら片一方だけやっているときはどうしたらいいのかになります。それは、ないで済むか、もう一度やったときに、片一方は経験していますので、子どもたちの感覚で言うたら、また同じことをしているんですかというようなことになるし、そういう面で言うと、非常に行事の組み方が難しい。

この辺は、連絡をとり合うことによって改善はできるんですけども、そういうようなことが以前はあったと。

○山本委員　小中一貫教育というものの真の目的ということが、まず気になるところでございます。

今現在問題になっております不登校の問題、いじめの問題、その他、さまざまな問題が山積しているので、子どもたちの発達に見合った教育的効果が高められるかどうかというのが、まず疑問です。

これと、宇治田原町らしい特色を持った教育が、正直、できるかということです。１中２小学校、今現在ということなんですが、やはり奥山田小学校の問題が少し私は気になっているところでございます。統廃合というか、統合の。

ところが、人数動向から見ますと、非常に厳しい現実が存在する中で、地域のあり方、地域コミュニティーのあり方、それと、子どもたちにとって地域とはといった、宇治田原町にとってはというところは、少し危惧するところでございまして、それを、一体型教育ということにとらわれずに、今、分離型の形でもらっているわけですから、これを行いながら、よいところ、宇治田原町にとって進めやすい、取り組みやすいような教育制度というか、カリキュラムを含めて、考えてはいかがでしょうかなと思います。

その上で、一体型というものを十分、受け継ぐメリット、デメリットを考えながら、決断する必要があると思います。

○西谷町長　小中一貫という形で、今は、分離方で連携を取り合いながら行っているとのことで、その中で施設の事がやっぱり、将来はでてきますね、この子どもの人数から見たら必ずその時はくるけども、そういった中で、地域のコミュニティーも違いますし、また、子どもにとって宇治田原町は何だというのもあるでしょうし、その中で宇治田原らしい教育というものもやっぱり考えていかなければならないというふうには、私自身も思いますし、そういった中で、将来的には、確かに子ども人数から見ると、１クラスでずっといくというのがだめのか、いいのかというところも、確かにあると思うんですけど、やっぱりある一定の規模の子ども人数がいなかったら、子どもにとって家庭も社会やけども、学校も社会の一員という部分の感覚の中では、ずっと１クラスで同じメンバーでずっといっちゃうというのは、またそれもちょっと厳しいところがあるなというのは思います。

私ごとで悪いですけど、私、小学校１年から６年まで１クラスしかございませんでした。そういった中で、二十何名の少人数の６年間でございましたけども、それはそれなりにという、今の感覚ではそういう感覚でございましたけれども、やはり社会もいろいろ変化する中で、やっぱり考える力とか生き抜く力、難問に対処する力、いろんなことをやっぱり子ども自身が育んでいかなければならないような社会になってきているんかなという気がしますけども。

そういった中で、山本教育委員さんがおっしゃったのは、今は分離でいろいろなことをやって、中学校で１つになっているけども、やはり厳しい状況は、これから何だかんだとする中では、一体型を視野に入れていきたいというふうな考えではないかということですね。

ほかにご意見どうですか。

○山本委員　ちょっと反対の立場から申してよろしいですか。

先だって教育委員会の中でもお話あったと思うんですけども、今、４キロ、６キロの通学距離の問題が非常に出ております。横に一体型の施設というふうなことですけども、その前に、今、宇治田原小学校、田原小学校、維孝館中学校、歩いて、自転車通学をされてる、ずっとしますと、やはり体力、全身力、そのいろいろな面から考えますと、今のこの通学という時間が非常に大切なのではないかなと。

それを削ぐための、また逆に言うと、それに対応する何かがないと、また、子どもたち、将来を担う子どももたちの、宇治田原に通ったなという実感が薄れるんじゃないかな、そういう心配もあるということでございます。ちょっとあえて。

○西谷町長　確かに何キロか歩いて、私自身もそうですし、近くでもそれぐらいやったら、それもある。そういった中で、通学途上でのやっぱり学ぶことができることが確かにあろうかというふうに思いますけども。

ただ、そういった中で、色々学ぶ反面、だんだん子どもが少なくなって、安心・安全面で心配される。今までたくさん子どもがいた中では、めったに１人、２人で帰らなかったという部分が、だんだん帰るようになって、しまいには迎えに行ってあげるようになると。その部分は、本当に小さいことですが、これからはもう少し整理していくのかなという気がしますけれども、しかし、通学途上での登下校で起こること、その中で、やっぱり自然に親しんだり、いろんなことを学ぶ分野があると思います。それを何か代替でどういうものができるのかという、例えば統合をした場合には、どういうふうなことがあるか、遠いところも、あるいはどういうふうにしたら一番いいか、これも一つ課題であります。

そういう部分での通学途上、下校途上での学びの場というのは、確かにあると思います。それをどういうふうに補っていくのかということの、やはり隣接型なり一体型になった場合にどうなっていくのか、それも課題ですけども。

○杉野委員　保護者の立場から何点か。

まず１点目なんですけれども、先ほど大嶋委員さんがおっしゃったように、１クラスのままで６年間小学校一緒というのは、同じ環境でずっといってしまうとデメリットは大きいと。クラス替えがあって、それでまた友達が、関係が変わってですとか、実際、今のままで同じクラスのままで別々の小学校できて、中学校でいきなりクラスが増えてとなると、今度、それこそ中１ギャップというのが、また大きくなるんではないかなと思います。

今、両校間で５年生林間、６年生で修学旅行ないしに行きますけれども、そういった２年間で、今までの６年間が取り戻せるかと言ったら、取り戻せないという意味で、実際はやっぱりクラス替えができる環境のほうが、子どもたちにとってはいいと思う。

もう１点なんですが、田中委員さんがおっしゃっていた費用対効果という面なんですが、これ、いつも難しい問題なんですが、どうすれば効果が上がるか、これは効果がないのかというその線引きというのはどういうものかというのが、ちょっとイメージが湧かないんです。

今いる子どもたちで、この表を見てもらったらわかるように、既に１クラスの学年がもう出だしている中で、このままでいくと、将来的には１校にしようかという話になっ

ていますけれども、もう既に始まってる子たちにしてみたら、６年間ずっと１クラスのままでいってしまうという可能性が大きいと思われるんです。なので、将来的、今すぐできる話ではないけれども、協議時間が短いと委員さんがおっしゃるんですけども、そうなれば、できるだけ早く一体型、隣接型として進めていこうと思えば、じゃ、もっと協議時間、３月までに方向づけるのであれば、この２月、３月についてはもう少し会議を詰めてもらって、やはり結論というか、方向づけとしては３月末ぐらいには出すのが、私はいいとは思います。

山本委員さんがおっしゃっていた地域コミュニティーの在り方なんですけれども、宇治田原町ならではの行事を、子どもたちは、今、古老柿づくりなり、お茶摘みをしたりとかして、宇治田原町ならではということを経験するので、こういったことはなくならないであろうと私も思っていますし、子どもたちも、柿屋を見ると、古老柿、これ、つくったわと言いますので、やはり思い出として残っているので、こういった行事がずっと続いていくのであれば、宇治田原町ならではという教育であると私は思います。

あと、通学距離のことになると、ちょっと難しいんですけれども、ただ子どもがどんどん減ってきて、私は緑苑坂に住んでいるのでまだ子どもが多いほうなんですけれども、朝は確かに登校班でみんなで行っているんでいいんですけれども、やはり帰りとなると、学童に行っている子も多いので、結構ばらばらという感じで帰ってはきています。

緑苑坂でそうなので、ほかの地域となるともっと少ないのではないかなと思うんです。だから、場所にもよりけりということにもなってきますけども、子どもたちの安心、交通事故とか、今、不審者とかもたまにメールが来たりとかして心配するときもあるんですけども、そういうことを考えると、長く歩くのも確かに体力もつくしいいことではあるけれども、親としてみたらやっぱり子どもが帰ってくるときは心配なので、今のままというか、施設を新しくつくられるとしても、現状のままではちょっと心配だなという気がしています。

以上です。

○西谷町長　メリット、デメリットどちらもある。

○増田教育長　１つは、判断の時期のことなんですけれども、今、子どもたちの入学予定数が見えてきている。今も現状、田原小学校においては３学年が１学級ですし、それから、６年後においては、宇治田原小学校においてもほぼ１クラスになっていくということが、もう確実になっています。

そういう面で言ったときに、人数的な子の動向を見据えたときには、今こそ決断すべ

きときにきている、方向性を決断すべき、決めるべき時期に来ているんではないかというふうに感じているのが一つです。

２つ目、町内の両小学校というのは、１４３年の歴史、維孝館荒木小学校以来の地域の皆様方に支えていただいた長い歴史があります。その中で、多くの輝かしい栄光ある歴史、伝統を育んできたというふうに思っています。その中で、地域の方々もたくさん支えていただいた。今もそれぞれの区においては、子どもたちを地区の中で育てるようなお取り組みをたくさんしていただいている。自らの関係を持つお孫さんがいるかいないかじゃなくて、それこそ本当に区を挙げて、地域の皆さん方が子どもたちのためにということでお取り組みをいただいている。

その中で、子どもたちがいろんな体験をし、親御さんだけでは与えていただけないものを地域総がかりで支えていただいているということに対しては感謝しているところです。

このたびの、寺子屋という形の考え方もそうですし、それから、緑苑坂なんかでしたら、公民館を開放して読まなくなった本を集めて、老人クラブの方が子どもたちの居場所をつくって――銘城台で、すみません――いただいているという。本当にありがたいなと。この取り組みというのは、施設が一体であっても、分離型であっても、ずっとやっぱりおらがまちの子どもたちをおらが育てていくという、このかかわりが一番大切じゃないかなと思います。

それから、学校自身も多くの地域の方々に支えていただいている。これは、分離型であっても一体型であっても、やっぱり、今、宇治田原の地域にお住まいの方々が、おらのまちのための、おらが子どもたちのためにという思いの中で育てていただけるものじゃないかと、私は感じています。

奥山田の時にも少しありましたけども、地域の皆さんが、その地域から学校がなくなることの寂しさというのも物すごくあろうかなという、もし仮に一体型という方針になりましたら、あろうと思うんですけれども、ただ、それ以上に私自身が思うのは、子どもの状況を見て子どものためにどうなのかということに重点を置いて、そこから寂しい思いが、仮に仮に一体型にする場合にあったとしても、ご理解を、そして改めてお力添えをお願いしたいという思いを持っています。

また、分離型の場合やったらなお一層その分のところで同じようにお支えいただけたらうれしいというふうに思っている。

僕の判断基準は、やっぱり子どものためにどうなんかということを最重点にして判断

してまいりたいなと考えているところです。

○田中職務代理　今日はせっかく総合会議ですので、実は、私たちは、教育委員会としては子どもをやっぱり中心にした教育行政であってほしいという観点から、子どもにとって何がいいかという話でさせていただきましたが、財政面、地域づくり、まちづくりの観点から、行政の方のご意向も伺いながら話す必要があるので、後でまたちょっと聞かせていただきたいところですが、その前に、私がもう少し論議が必要だと思ったというのは、小中一貫教育が進むことは確かですね。一体型です。

小中一貫教育をやって、どんな力が果たして本当につくのかということに対しての検証がどれぐらいできるかということなんですが、これは、奈良県での小中一貫教育サミットで出た資料なんですけれども、文科省の資料なんですが、実践校のアンケートをいただいていますが、成果があったというので、学力向上で成果があったというのは半分もないんです。半分もない。

○西谷町長　学力向上につながったという学校は半分もないということですか。

○田中職務代理　全国学力・学習状況調査の結果、向上した、４０％。都道府県市町村による学力調査の結果、向上した、４２％。民間の標準学力調査の結果、向上した、小中一貫教育を進めた先進校ですね、これが３３％。

よかったというのは、非常によくなったのは、中学校への進学に不安を訴える子どもが減少した、いわゆる中１ギャップです、これが６７％という、そのほかにも、小中学校の教員職員間での連携がスムーズになったとかというのが３３％、それから、それらの本当に費用をかけた教育効果があるかというと、小中一貫教育をやったらそれでオールマイティーではないということを、まず私たちがちゃんと踏まえて進まないと、だから小中一貫教育をやる、進むからいいんだというまでのワンステップだなと、私は思います。

それから、小中一貫教育関係で言いますと、小中一貫教育を進めるのは、隣接または統一型がいいとは思っています。むしろ問題は、今言っている適正規模の問題です。１学級になった場合、いったい子どもたちの育ちはどう変わるのかという問題なんですが、実は、全国的に見たら、ここにも田舎が多いですから、全国的に言うと７学級、８学級のところが一番最多ですね、適正規模１２学級にいっていない学校が半数近く、ということが続くと、そうしないと、子どもたちの学力は何としてもつかない、１学級ではつかないという、学力ですね、育ちが保障できないという結論まで持っていきにくいというのがある。

これは、無理だろうというのでは、例えば、複式学級というのがありますね、３年生と４年生が一つの同じ先生による、全く違う学習を１人の先生が教えるのですから、これはデメリットがはっきりしていますので、そういう場合は、そのほうが好ましいではなくて、ぜひともこれは統合したほうがいいだろうという必要性が出てきますけれども、１学級になるということに対するデメリットに対しても、やはり十分検討して、だから統合するといって、それだけのメリットがあるんだということを踏まえておかないと、説明に困ることがあるんです。

私なんかは、子どもに対する教育効果があるシステムは何がいいかということを主に考えていますので、これから生きていくということにもそうなると思うんですが、むしろ、例えば、そのことによって地域の核となるそういう地域づくりなんかが崩壊するとか、それから、先ほど言った通学問題をどうするかの問題とか、財政上の問題とか、実は子どもにとって一番いいというやつのほかに、非常に大きなファクターが、素因があるんです。

それらについては、行政の方と膝を交えて話さないと、前にも教育委員会で、そこは行政のことは、今、論議せんでもいいんと違うかというような話をしていたぐらいですから、ぜひこの場ではそんなような話も、もう少し煮詰まってからでもいいですけども、しとかないといけないんじゃないかなと思います。

○西谷町長　時間のほうはどれぐらいの予定なんですか。

○清水課長　特にございません。

○山本委員　暫時休憩です。

○西谷町長　トイレ休憩をちょっと。

（休　　憩）

○増田教育長　先ほどの田中委員の意見につけ加えをいたします。

学力につながるというその部分のことなんですけども、そのアンケートにつきましては、分離型の学校、一体型の学校をあわせて、文部科学省がそれぞれの学校に対してアンケートをとった結果です。その中で、本町のように道半ばのところもあれば、数年かかって既に積み上げられたところの学校も含まれているということです。

その中で、８割、９割のところがそうだというふうに感じているのが、子どもたちが中学校への進学に不安を覚える児童が減少したということ、それから、いわゆる中１ギャップの緩和がされたということ、それから、小中学校の教職員間で互いの良さを取り入れる意識が高まったということ、それから、小中学校の教職員間で協力して指導に当

たる意識が高まった、この辺りが８割を超えていますし、また、７割以上で言えば、上級生、つまり中学生であったり、それが下級生に対して、１年生、２年生等に対しても含めてだと思うんですけども、小学校の全体かもわかりませんけども、下級生の手本となろうとする意識が高まった、それから、小学校教職員の間で基礎学力保障、中学校の１５の春を見据えて、その中で基礎学力を、しっかりそれを含めた目で基礎学力をつけていかなあかんという意識が高まったという、それから、教員の指導方法の改善意欲が高まったなどが７割を超える学校の成果として上げられているということです。

本町においても、現在、校長、教頭、教務主任が、また、コーディネーターが月に１回、勤務時間帯をずれてでも集まって、３小中学校の子どもたちを一つのものとして指導に当たっていただいているという実態があります。それも、本当に頭の下がる思いです。

また、教職員も年６回にわたって、教科別、また領域別の部会を開いて、そしてまた授業研究会を開いて、お互いの信頼関係をつくりながら教師力を向上させるために努力をしていただいていると、そのことが、分離型よりも一体型のほうがより効果が出やすいということと、より教師の意識、指導力の向上によって、子どもたちの学力につながっていく、この努力については、私は日本全国の中でもトップレベルやと、僕は思っていますけれども、その力が一体型になればより効果が増すだろうということで感じておるところです。

小中一貫教育の本町での最大の成果の規範意識の醸成という点におきまして、中学生において、安定した子どもたちの学習が練られるようになってきているとか、かつては、ヘルメットをかぶっていない児童生徒が多く見られたんですけども、今、ほとんどの子どもたちがそういう規則をきちんと守るということ、それから、中学校のほうでは、さらに時間を守る、礼儀を守る、清掃も含めて場を清めるというところで、きちんと指導していただいている、そこが小中学校の中でも一体化する中で、それが学力をつけていく基礎にもなっていくだろうというふうに感じておるところです。

そういう意味で言うと、施設の効果というのもさらに大きいと思っています。

○田中職務代理　今の教育長さんのお話に、私も賛同と若干の反論をしてみます。

一つは、維孝館中学校の公開授業等を見せていただいて、地域教材について非常に進んだ取り組みをされているなというふうに感じました。以前は、小学校で古老柿づくりをやって、３年でやって、６年でやって、中学校もやって、各学校でダブっていたこともあったように思うんですが、今は小学校から中学校へ系統的に地域学習が並べられて

いる。学習に変化が出てきている。

それから、生徒指導面でも非常に落ちついてきているなと。いわゆる中１ギャップについてはかなり減ぜられたんじゃないかなというふうに。

反面、反論するということで言いますと、同じくさっき言いました小中一貫教育を、全国的にやられた学校でのアンケートの課題の面でいくと、一番効果が高まっているのは、小中の教職員間での打ち合わせ時間の確保、児童生徒間の交流が深められた、移動時間、教職員の負担感、多忙感の解消というふうに、先ほど教育長は、すばらしい先生方のおかげでという評価をされましたけど、逆に、これがずっと続くと、教師の負担感の増大ということになりますので、それについても十分配慮しながら、じゃ、それを解消するためにいろいろな改善策を織り込んで、一体化するならするかというのもやっておかないと、課題も踏まえて進めていかないといけないのではないかなと思います。

○山本委員　ちょっと話が違うんですけども、私の認識でちょっとお話ししたいのは、今現在、深刻な学力活動に問題を感じているのはあります。やはりこれは、持ち家率とか離婚率、登校率が大きな問題というのが、アンケートであります。また、家庭間、経済格差、こういうようなものが子どもたちの学力格差につながっているんじゃないかなという記事が載っておりました。

ですから、こういうような問題が一体型の学校教育でどうクリアされていくのかということでは、やはりたくさんの生徒さんの中でたくさんの教師がいることによって補い合えるんではないかなと。やはり社会に出ていろいろな立場の人間に会える、話ができる、そして考える、こういうことがますます必要だとなってくるのが一つ。

もう一つは、家庭が学校のことをよく理解して、子どもさんを育てるという環境につながることが一体型の特徴ではないかなと、それができるんではないかなと思うんで、その検討に当たっても十分考慮しないといけないのかなと思っています。

ちょっと話が違いましたけども、やはり今置かれている現状は非常に複雑多岐な中で、やっぱりクリアしていかないといけない問題がたくさんあるということだけは認識しないといけないと思っております。

○西谷町長　家庭の事情、子どもさんの置かれてる家庭の事情。

○山本委員　事情もある、経済格差もある。学力格差というか、そういう教育格差がある、そういうようなものが問題の中に上がってくると思います。ここに。それが、一つまとまって、カバーできるんではないか。

○西谷町長　その何か教職員が、それだけ一つ集結するということの考えという。

○山本委員　はい、要するに１０人いるよりも、３０人、５０人いたほうが知恵が集まるという。パワーが、子どもに向けられる力が増える。やっぱりより多くでと、これは一体型の特徴じゃないですか。思いますけど。

○田中職務代理　反論ばっかりであれですけど、学校を統合すると、基本的に児童数が減る学校も出るんですが、基本的には４学級が３学級になるとか、３学級は３学級のままやとか変わらないんですけども、４が３になったり、３が２になったりすると児童数はふえます。１人当たりの指導の子どもは必ず増えるです、基本的にはプラスにはなってもマイナスにはならないという様に。

　そうすると、先生が目が届く範囲は、基本的には増えないんです。それを、やっぱりフォローしないとこの制度は失敗すると思うんで、要するに、担任以外のそういうフォローする教員の配置等を十分考えて、少人数指導に対する対応を十分しなければ、一体型とかそういうものについては、失敗する可能性はある。

○山本委員　ちょっともう一つ、言い忘れたんですけど、世代間ギャップ、年齢間ギャップが非常に取り沙汰されている、これは、二十の子どもさんが、一つ二つ上のお兄さん、お姉さんであってもおっちゃん、おばちゃんというぐらい、非常に自分たちの殻に閉じこもりがちなものが、今、出てきつつあるということにつきますと、やはり社会の中で、或いはまた学校の中で、様々な方と会う、様々な経験をする、社会体験をする、こういう総合教育というものの必要性が非常に問われているということでして、そのような環境に持っていく必要があるためには、一体型にするほうがよいのではないかなと思います。申し遅れました。

○西谷町長　増田教育長。

○増田教育長　先ほどの山本委員のご意見の補足をさせていただきます。

　おっしゃったことは、つまり両方が単学級になっていったときに、その学年の子どもたち、単学級ですから、１人の教師が全てを見ないといけない、今は２クラスあるところは、その２人の教師で学年を見ていくことができる、だから、子どもたちを見る目の教師の数をやっぱり増やしていくことができるのは一体型ではないかということでのご意見ということで、さらに、田中委員さんのおっしゃっていただいたのも、仮に２つを一体型にする場合でも配慮すべきこととして補足いただいたことやないかなというふうに思います。

　課題というのは、児童・生徒の登下校の問題も含めて、いろんな様々な仕組みも更にどんどん考えないといけない、それから、今後の本町のあり方のところでも、併せてや

っぱりこちらにしますという方向づけはさせていただきますけども、課題はいっぱい残りますので、そういうところについては、教育委員会のほうでの４月以降の中で検討を、またしっかり連携をさせていただきながら、その課題解消に向けて、たとえ一体型になっても、たとえ分離型になったとしても、やっぱり課題解消に向けて協議をさせていただけたらうれしいなというふうに思います。

それから、自分の一つの意見ですけども、今こそやっぱり宇治田原で一番すばらしいのは何かと言うと、維孝館の教育に代表されるんですけども、やっぱりおらがまちの教育ということで、維孝館中学校に対する住民の皆さん方の誇りとして、やっぱり支えていただいている、教育そのものが、たとえ一つであっても二つであっても、それは小学校でも言えるんですけども、まちぐるみで育てていける環境になるんじゃないかという、これが他の市町にない、また他の地域にない強みじゃないかなと思います。

だから、そういう面でいくと、たとえ分離型になっても、一体型になったとしても、本町の場合は、地域を挙げて、そして地域と密接な関係を、その学校とつくっていくことはできるんじゃないかというふうに感じておるところです。

○西谷町長　それが分離型であっても、一体型であっても。

○増田教育長　はい、そうです。

○西谷町長　どっちにしても、おらがまちというか、そういう気持ちで支えてくれはる。

○増田教育長　はい。そういうような思いです。

○西谷町長　それで、今、子どもが育っていく。

○山本委員　すみません、大変、町長さんを前にして失礼なことを言うかもしれませんが、本町の生き残り戦略における大事な柱は教育であると、私は思っております。まちづくりをする上で、人口減少に歯止めをかけないといけないという事実もございます。また、子どもたちの立場に立たないと、これからこの地域が選ばれない、学生が来なくなる意識を持たないといけないのかなという危機意識も持っています。

ですから、今現在、一生懸命学校の先生方が頑張って自立型の教育に、授業に取り組んでいらっしゃって、より大きな効果が出ているという事実もありますけれども、やはり環境が非常に厳しくなっている中で、ますます子どもための教育環境の充実、そして、学校の先生方をしている立場としての環境の充実、そして、地域の方々あるいはまた保護者のニーズに応えられるような教育であってほしいなと思うんですけども、その辺、町長さんのお考えを聞かせていただきたい。

○西谷町長　本当にそのとおりやと思います。おっしゃるとおりです、それは。

とりあえずまちとして、これからのまちづくり、子どもたちは減少していくということはもう、やはり子育てしやすいまち、また、学力向上してくれるまち、こういうのもまちの魅力になると思うし、親御さんが、ああ、あのまちに住んで、子どもがそこの教育を受ければこんなすばらしいことはないんやという、そういう部分でのまちづくり、これはいろんな施策、一貫だけでなくて、いろんな角度から、福祉面でもそうだと思うんですけども、やっていかなければならないというふうに思っておりますし、子どもの立場もそうですけど、親御さんの立場もやっぱり考えていかなければならない。

その中では、先ほどおっしゃったような、経済的な部分でも、やっぱりここのまちに住んでいるからこそこんなお金が要るねんというやつが発生してる部分をどのように補ってあげるかという、こういうことも大変重要であるというふうに思います。

そういう角度からしてのまちづくりとしては、確かに大事やと思います。それは本当に子どものことだけを考えて、子どものこれからの教育の環境というか、どうしてあげるのが本当に一番子どもにとっていいのかということですね、結局そこにたどり着いてしまうんですけども、将来１クラスになってしまいますよという部分での、子どもの教育現場がどうなるかという部分では、確かに山本さんにさっきもちょっと申し上げましたけども、ある程度やっぱり切磋琢磨できる環境にあるべきやろうなというのがやっぱり思います。

全く安定、毎日が同じサイクルで流れていって、いるメンバーも毎日が同じメンバーでという、そういう部分が本当にいいのか、やっぱり定期的には、２クラス以上があって、定期的にクラス替えがあったときに、またそれはそれで一つのクラスという社会ができて、その中で色んなことを学んでいくというふうなことがやっぱり必要だろうかというふうに思いますし、そういった中で、いろんなクラスで何か問題が起きて解決しやんなんとか、こういうことをみんなでやらんなんという、どうみんなで工夫しようとか、いろんなことを考える中で、同じクラスでずっといったら同じパターンになってしまう部分が、ある程度クラス替えによって、いろんな、それぞれ１０人いたら１０人の生徒、違いますから、そういった中でいろんな考え方を耳にして、お互い子ども同士が耳にして、お互いが感じる、その中で支え合うとか、助け合うとか、思いやるとかいう部分も、やっぱり出てくるのかなというふうに思う、教育の現場として。

まあ、その中で、先生の体制をどうするのかというのがありますけど、一番に子どものことだけを、もうほかでもいっぱい、ほっちゃかしとく、子どもだけのことを考えて、この子がどんだけ立派な人間形成ができて、社会の荒波に出ても溺れない、沈まないよ

うになってくれるのかなというような、僕はやっぱりそういう部分では、ある程度規模がある中で育っていくという、やっぱりそうやと思います。

僕は、悲しいことに維孝館中学校は行っていないんで、宇治田原小学校は１クラス行きましたけども、そこから京都へ出ちゃいましたけども、やっぱりギャップは大きかったですよ、そんな。むちゃむちゃ大きかった。それで、いろんな、よそに中学校も近所にいっぱいあった中で。僕は中学は１校しかないから、よその中学と話す。

そういう中での、今、結構、逆に、自分ではよかったかなというのは今思いますよ、せやけど、そういうふうな部分で、やっぱりクラスは、１クラスよりは２クラスあった中でお互いが育っていくという部分が、きょうびの子どもにとっては、一回外してしもうたら、僕はそういう気持ちでいますというか、そうであるはずやというふうなことは思います。

そうした中で、今、これやったらこれで将来見ていたら、できるかなという気がします。施設が一体なのか、隣接なのか、隣にあるのか、いずれにしてもそういうあれはできるのかなというふうに思います。

ただ、いろんな地域の学校という部分もやっぱりありますし、学校を支えてくださる、例えば、宇治田原小学校、田原小学校、学校を支えてくださる人がたくさんおられますね、これが一つになったときに、うまく支えてもらえるような体制がとれるのか、これもやっぱり考えていくべきやと思います。

学校現場もそうなんですけど、いろんな人と、近所のおっちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、いろんな団体の方という中での経験、これもやっぱりふるさとの体験という部分でも、やっぱりそれはそれで総合的ないろんな教育の中でもやっていかんなんし、近所のおっちゃん、おばちゃんに叱られたりする部分、こういう部分も規範意識の向上につながるという、それをうまくフォローしていけるということも、やっぱり考えていかなければならない部分の一つであろうかというふうに感じるわけでありますけども、子ども自身も考えたりもそうですし、周りの大人、地域社会がどう支えられるのか。

通学とかの方法になると、これはちょっとまた別個の話になっちゃうようには思います。これは、また安心・安全な部分とか、そういう部分ではあるかと思いますけども、これは、どういうふうな補い方をするのが一番いいのか、安全面をどう図るのか、ここ数年うちのまちには、不審者情報などはあまりない、そういった中で、地域が支えて、見回り隊もたくさん人が出ていただいて、ただいつ起きるかわからんという部分は常に

意識をしておかなければならないことであろうとは思います。

それをどう補うんかというのは、また別の部分で、やっぱりできるもんやというふうに思いますけども、ただ一度しかない子どもたちが歩む人生を、本当にどういうふうに人間形成をさせていくんかということを、やっぱり一番中心に考えるべきで、そういった中で、教育現場、先生方のご意見も色々あろうかと思いますけれども、一体型、隣接型、分離型とある中で、子どものことだけを考えるとそういうふうに、僕自身は考えてしまう部分が、正直言ってございます。

これがまた将来、例えば、新市街地に山手線ができました。それで、企業誘致がいっぱいできてきました。城陽は城陽で、いろいろ企業ができたり、アウトレットができてきました。その中で、ベッドタウン的に宇治田原は住宅開発がどんどん進んできまして、ということによって、人口がまた増える、僕はそのことをもう一つ狙っておるんですけど、そうなると、ここで育てて、子どもを育てて住んでもらえるという、そういうことになればまた考えていかんなん部分は、今後出てくるほうが、僕はありがたいと思いますけど、今現在、子どもの状況とか、子どもさんの人数を考えると、私自身は、子どもにとって一番いいのは何やというとこら辺はそういうところに落ち着くんかなというふうには考えますけど、やはり教育委員会のほうでももう少しいろんな角度から、その辺も考えていただければというふうに思います。

杉野委員。

○杉野委員　すみません、先ほど経済格差が学力格差につながっているという話をされていたのがあったんですけども、これは、私、講演会で聞いてきた話なんですけれども、やはり塾に行かせている子のほうが、行かせてない子よりも学力が高いというのは、もう今や当たり前の話にはなっているようなんですけれども、でも、行かせてやりたくても行かせられない家庭というのは絶対的にあるわけで、そういったときに、学校でやっぱりしっかり、塾に行かせなくてもみんな安心して１５の春を迎えられるような学力をつけさせていけるような宇治田原町の教育が、私は理想的だと思うんです。

この一貫教育になって、一体型になってしまうと、学校の先生が減ってしまう可能性もあるとおっしゃっているんですけれども、そうではなくて、先ほど田中委員さんがおっしゃったように、補助的な先生をつけていただいて、学校の先生が減ることなく、さらに基礎的な学力はつけれるような、そんな教育を進めていただきたいなと思うと、どうしても財政面で大変だということを、ちょっと聞いたんです。

やはり新しい先生を増員しようということの課題にしても、法律に子ども何人に対し

て先生は何人と決まっている以上、余分に先生をしていただくということは非常に大変なことだとは聞いたんですけども、でも、私は、先ほど教育長もおっしゃっていたように、先生は、今でも小学校と中学校の先生が部会を開いて一生懸命やっていただいてるんですけれども、そのことによって先生の負担が増えてしまうと、やはり逆効果になってしまうので、そうではなくて、負担がかからなくて、本当に余裕がある人数というのは難しいとは思うんですけれども、ただ子ども一人一人に目が行き届いてしっかり教育が受けられる、逆に言うと、塾に行かせなくても高校には行けますよというのを、これもすごいことだと思うんでね。

今現在、中学生の子というのは、もうほとんど塾に行っているような状態で、近いところでフレックス、それやったら自転車で行けますけれども、あとは、やはり宇治に出たり田辺に出たりということで、子どもたちは部活が５時６時に終わってから町外に出て、塾に行って、晩ご飯もそこそこにして、それで塾に行って勉強して帰ってきて、夜１０時ごろになって、そこからといったら、家族と会話する時間もなくということで、せっかく中学までは町内にいるにもかかわらず、今度は家庭での時間がギャップになってくるということになると、やはりもったいないと思うんです。

なので、今すぐどうのこうのとできないとは思うんですけれども、学校の先生をもう少し増やしていただきたいなと思っています。

○増田教育長　ちょっとすみません。

本町のちょっと教育の状況だけ、もう一度、町長に御礼を申し上げます。

ＡＬＴは本町、３校で２名配置されています。図書館司書も、３校で３名配置いただいています。それから、特別支援にかかわっての支援教員の配置、しかも各校の配置になりますし、学力充実に向けて、３校で実は配置いただいているということで、本町については、本当に他の市町とは比べ物にならないぐらい人的配置をいただいていることに対しては、教育委員会としては本当に厚く御礼を申し上げます。

ただ、施設が分離型、一体型、仮に一体型にするにしても、学校数がどうじゃなくて、やっぱりより効果が上がるように、財政的な問題ではなくて、子どもたちにとっての効果というのは、今後ともぜひ、先ほど田中先生のほうがお話しもされましたけども、そこについてはそういう結論に達した場合につきましては、また４月以降の中で検討していくことになると思いますので、ぜひ教育委員会、または本町の子どもたちのためにどうぞお力添えのほうよろしくお願いいたします。

○西谷町長　確かに塾に行っているということは、やっぱり受験用の勉強を教えてもらえ

る、それは中学のカリキュラムの中に受験用の勉強みたいなところがあります、その辺はわかります。

○大嶋委員　すみません、公立の、今、前期が行われているとき、基本的には、中学校というか、義務教育９年間の中で履修したものを、公立の学校についてはするというようなことが大原則です。

　ですので、中学校の学習をしっかりとやっていれば解けるような問題であるということです。はい。ですから、あと競争ですので、その部分でのとか、または補習的な意味合いということが、一方あるのかなと思います。

　また、進学校とか、そういうところを目指すということであれば、早い時期から塾という子もいる。特に塾が増えていくのは、中３の夏ぐらいから受験を意識する中での行動かなと思いますし、また、親御さんもそこへの心配でというような動きが、ここ近年は非常に強いかというふうに思っています。

○杉野委員　学校での勉強についていけたら塾には行かせへんという保護者の方がおられます。

○西谷町長　ああ、そうなんですか。

○杉野委員　はい。

○西谷町長　学校の勉強についていけない。

○杉野委員　いけないから塾に行かはる。中間や期末でどう考えても信じられない点数をとってきて、だって、先生が言うてることがわからへんもん、でも、先生に教えてもらおうと思っても、先生が時間がないという、まず、大概中学校でしたら部活の顧問を持っておられますよね、先生。そしたら、もう６時間目が終わったら、先生は部活に行かはるんです、子どもたちも部活に行かはる。補習をやってる時間がないということで、学校の先生もできないし、子どももやっぱり補習をやってる時間がないということで、結局、学校で当然教えてもらうべき、分からんかったら学校の先生に聞くんやでということができていないから、わざわざ部活が終わった後に、分からんかったのを、補習的な塾に行って教えてもらうということになっています。

　うちの子はまだ中２なんで、受験用というのは、まだ、どちらかというと、行ってなくて、周りも学校の勉強が分からへんと言うているから行かしてるねん、このままやったらここ分からへんしというので聞いているんで、学校の先生が時間がないということは、それだけ部活に忙しい、それで補習をしていただける先生がいらっしゃらないのかなと。

実際に進学校とかに行かれる子というのは、私、いつも自分の子がどこの高校に行けるのかというのを余りよく知らないので、何とも言えないんですけれども、周りで聞いてる限りでは普通の公立の高校に行っておられる方が多くて、私学のすごいレベルの高い学校に行かれてるというのは、本当に少数なんです。どちらからというと、近辺の高校に行くために塾に行っておられるという形が多いです。

私学のすごい賢い学校に行こうとしているご家庭は、もう小学校から行っているんで、塾には。それで、中学校では、先生が時間がないとおっしゃって、私も頼んだこともあるんですけど、担任の先生に。いや、無理ですと、あっさりお断りをされたので。それで、分からんかったら休み時間に聞いてくれたらいいよとはおっしゃったんですけど、別に休み時間に聞く子というのは、ちょっと分からへんだけのことで聞くだけで、いっぱいわからへん子は聞けないと思うんです。どこから聞いていいかわからないので。ということは、もっとレベルを下げた段階での補習が必要になってくるかなと思います。

なので、中学校の先生が足りていないというわけではないとは思うんですけども、ただ先生も忙しいとはおっしゃっていたんで、いろんな役割があって、参加したりとかしなきゃいけないから忙しいとおっしゃったんで、先生もお忙しいなとは思うんですけど、そこでさっきの意見になるんですけども、この先生の人数が少し足りていないのではないかなと、私は思っています。

小学校も一緒なんですけども、小学校の先生も、やはり面談とかで会ってお話しすると、忙しい、少人数にかかわらず、いや、何人持っても一緒やでとおっしゃるんですけど、２０人の２クラスでも、４０人のクラスでも一緒なんやけども、２０人やから楽かと言うとそうでもないし、ですので、とりあえずたくさんすることがあって忙しいとおっしゃることが多いので、それは別に今年だけではなく、何年間かはお話はさせてもらっているんですけれども、いつも先生は口を開かれると忙しいと、恒常的に先生の数が少ないのかなと思っております。

○増田教育長　今、もう一つ、他府県のすぐれた取り組みの中のところで、地域の皆様方のお力をおかりするというようなことが進められていますので、この本町においても寺子屋「うじたわら学び塾」というのもそうですけども、子どもの意欲を大切にして、その学習意欲に対して応えられるようなシステムというのは、やっぱり再構築、また検討してまいりたいなという現状です。

○西谷町長　一体型、分離型があって、一体型になったほうがそういう面ではフォローしやすくなる。

○大嶋委員　今、現場のほうが、例えば、授業のやり方をこういうふうにしましょうという、授業の流れみたいなとか、それとか、家庭学習のあり方というのを、前はそれぞれの学校でそれぞれの手法でやっていた。その辺を交流して、方向性を合わせていこうかというようなところ。

ですから、授業であったり家庭学習、その辺のところが、一体になると、よりそれが具体的になっていく。宿題の与え方、それから、それの見方。それで、そこに人が足らないということであれば、そこで、保護者とか地域のボランティアの人がそういうのを見るような活動ができていく、そういう面で言うと、流れが、９年間の流れができていく。

そして、一番大事なことは、中学校となると意外といろんな面で話題になるんですけど、実は、小学校低学年からの積み上げの教科の部分で、中３の入試前に言われると非常につらいものがある。ということは、僕は義務教育の中でいうと、やっぱりそれぞれの学年のところでしっかりと力をつけて積み上げていく、そのことを一貫の中でやっていくという感じではないかと。

やっぱりそこのところを、しっかりやれば、先ほど杉野委員から言われたように、とりたてて塾云々に頼らなくてもいけるというようなことはできていく。だから、そのスポットのところを見るんじゃなしに、９年間では、またはもう少し、零歳児からを含める、それから、学校のみならず、家庭、地域も交えた中でやっぱり考えていかないとだめなんだ。

僕が実感しているのは、そこそこできた子も宇治田原にもおって、そこそこできると家庭学習をおろそかにする傾向があるように感じます、長年見ていて。その子らがもっとやったらもっと牽引力となって、授業全体も活気づきますし、宿題をやらない子も、大多数の子がやる、ああ、やっていかなければいけないんやなというような風潮ができ上がっていく、そこが、真ん中の部分が、案外やらんでもいいんやということになると、もうそのこと自体が取り組まなくなる、その辺のところの意識の改善をしていかなければ。それは単年度ではできない。やっぱり小さいときからの積み上げが役立ってきます。

先ほど貧困対策もありましたけども、そういうようなことをきちっと積み上げることはそこにつながるんだと。やっぱりその辺のところを少し整理しながら取り組む中身を、今まで６年間、３年間というものを連携して、それで９年間という形。それと、教師が、やっぱりそれぞれいるわけですから、そこの段階をしっかりと捉えて、それをクリアしたかしないかというようなものも、連携というか、また、情報のほうもしっかり伝えな

がら、この子はこういうようなところでつまずいています、ここは良くできますとか、そういうようなものも連携をしっかりしていくことが、子どもの学力のみならず、人間的にも成長させていく部分かなというふうに、最後にそういう観点でちょっと言おうと思ったんですけど、やっぱり教師のチーム力やと、僕は思っています。

だから、それをどう高めるか、中学校だけで高めるのか、小学校の先生も含めて高めるのか、それを、どこに、当てるんだといった時に、宇治田原の子どものところに焦点を当てながらやっていくんやというふうに思っています。

先ほどから言いたかった。

○西谷町長　教師のチーム力というのは、やっぱり一体型のほうがより強固に、強く能力が発揮できるとおっしゃるのか。

○大嶋委員　そうですね。毎日顔を合わせますし。

○西谷町長　宇治田原小学校の新任の先生から中学校３年の先生まで、全て同じ先生の中でやっていくというような中では、そしたら、小学校１年ではこういうふうにやったほうがいいとか、いろんなアドバイスができる、お互いができたり。

○大嶋委員　以前、僕が本当に若いときに、気になる子がいたとします。そうするときに、小学校では誰が担任やったかなというのは、調べないと、または、小学校に聞かないといけない。その校と直にコンタクトをとりながら、こういう時はどうでしたかというところで調べる。結構それに労力がかかる。ところが同じフロア、同じところにいたら、それはもうすぐですわね。そのときに解決するかもしれんし、少なくともその日のうちには情報交流ができるんです。または、ほかの知っている先生から情報を知ることができる。

そこのタイムラグというのは物すごく大きく、子どもには出る。だから、意外と子どもの見方を間違えて違う言葉を言うと、あっち向く可能性もありますから、その点はやっぱりしっかり分析して、どういう声をかけるのかということが大事やと思って。

そういう面で、やっぱり離れているよりは情報が密に伝わるところのほうが非常に効果的になってくるというふうには思っています。

○田中職務代理　教員の数なんですけど、今、小学校２校ですと、養護教員さんも２人、図書司書さんも２人、特別支援教員２人というふうに、随分配置されていますね、数だけの話をしますと。それが、１校になったら、じゃ、１校分で済むのかという、要するに、削減分がプラスアルファで使えるんじゃないかと。そうすると、今の１校分よりも豊かな手当てができるんじゃないかなということで、もし統合するんだったら、そ

ういうプラスがなければする意味がないなというのが１点。

もう一つですけども、全国学力・学習状況調査の結果で、秋田県が非常にトップクラスを走っていますね、秋田県は、そんな大規模都市であるということで塾がたくさんあるという学校じゃないですね。あそこの秋田県の八代であった文科省の小・中学校の設置・運営のあり方に関する作業部会ですけど、報告書なんです。

やっぱり学校の統合と少人数授業は非常に大きなあれなんですね。地域策で非常に教育に力を入れているんですね。あそこは、市教委のほうで、複式学級が多かったようですが、かなり統合を進めたと、もう一つ、そのかわりに少人数学習を大いに進めたと。そういう教育に対する行政の施策意図がやっぱりはっきりしているということが、秋田県の成績の上位につながっているんじゃないかという調査結果が出ていますので、それらを踏まえてひとつ賢明なる判断をしていただきたいなと、私は思います。

○西谷町長　学校自身は、そやけど、統合してはるから。

○田中職務代理　そうです。

○西谷町長　ただクラスは少人数。

○田中職務代理　いや、少人数というのは、要するに２学級のところにもう一人加配をつけて少人数、要するに少人数学級なんですかね。

今、田原小、宇治田原小でもやっていますよね、１人加配が入って、算数だけ習熟度ケース学習ですかね、そういうふうなきめの細かい少人数学習をやることによって、学習を保障していくというんですか、そういう取り組みをやっている　　。

○西谷町長　徹底的にした少人数。

○田中職務代理　ちょっとどっちのやり方もあるようで、学級が２学級から３学級にふえるときには人数が何人以内で３学級にしますからという、そういう具体的な、京都市少人数の取り組みとよく似たようなのでありますけども、宇治田原町は宇治田原町で宇治田原町式手厚い学習少人数の取組み。

○西谷町長　それは習熟度というものですかね。

○田中職務代理　いや、それは、もう今、私としては考えていないですけども、要するに先ほど言った、今日の授業でわかりにくい子どもたちは、じゃ、１時間しっかりと別のところで教えましょう、来なさいといって、教えられる先生が学校に来ているかどうか。

○西谷町長　小学校でも、中学校でもなく。

○田中職務代理　共通するテーマがあれば。

○西谷町長　そうですね。

○増田教育長　いろんな手だてや工夫を考えながらという。だから、施設の一体化ということと、もう一つはその中でどういう教育をつくり上げるのか。仮に一体型にするにしても、経済的効果ではなくて、子どもたちのためになるようなクラス政策と加味しながらやっぱり将来の学校像を描いていくことが必要なのかなということでは感じます。

○西谷町長　ほかには。

○大嶋委員　思っているというか、宇治田原町の本当に大先輩に感謝というところなんですけども、維孝館が戦後中学校学区制の変更によって、昭和２２年に開校したんですけど、３０周年記念史であったり、５０周年記念史であったり、そういうのを見ていますと、やっぱり教育への思いというか、宇治田原の子どもへの教育の思いというのがそこからにじみ出て感じ取れる部分があるんです。

その当時は、田原村と宇治田原村というのがあって、それぞれの小学校があり、そこに中学校をつくるというところで、本当に論争があったようです。

まず名称は、田原と宇治田原、田原中学校では問題があるし、宇治田原中学校ではというようなところで、いろんな論議がありまして、名前をどうしようか、市辺中学にしようかとか、大峯中学にしようとかあって。それから、場所の問題でもどこにするんだと。ちょうど真ん中に建てようかとか、地形のちょうど真ん中、または、行政区というか、その辺の真ん中やとか、一旦は分裂したそうです、この協議会。

それで、田原のほうは青谷と一緒になろうということで思ってはった。それも結局、地形的なもの、距離があるので、それもなくて、実際、田原村と宇治田原村の事務組合立で建てようと。場所が、現在の、今の場所です。それで、ちょうど真ん中であろうと。ただ、地理的には宇治田原のところに建っているけど、場所的に。当初は、隠谷の下ぐらいを予定されてた時もあるようです。地形的にいうとあそこが真ん中らしいです。だけど、まあまあ人口のバランスといいますか、そういう面ではあの場所と。そこでスタートした。

本当に、そのときにいろんな寄附とか、その辺の中でスタートして、実は、本当にスタートしたのは、宇治田原小学校の今の本館のところを間借りしてスタートしているんです。うちのおばあさんはここまで通ったそうです。歩いて、南から。それで、２年生か３年生ぐらいのときに、自分の机を持って宇治田原小から現在の維孝館中にみんなが歩いてきたと、そういうふうな昔話をしてくれました。それがスタートするまでは本当に住民の方は論議をしながら、宇治田原の子どもにも教育をということでされていって、それで、今の地にスタートしていく中で、もう７０年からになると思います。

それで、先ほどから幾つもありますけど、宇治田原の維孝館ということで、さまざまな部分でもありますし、もう八十何ぼの人まで維孝館の出身というようなところで、後世になっとるわけ。

次に、今度新たに今、小中一貫であるとか、そういう教育の行政の部分が変わろうとしているところは、やっぱりしっかりと僕らの責務としてやらなければならないというか、そして、それが何十年先に評価されてよしとする。今よいというものは必ずしも後々よいとは限らない。もし田原と青谷が一緒になって中学校ができていたら、今どうなっているかと、それを考えますと、本当になかなか厳しいものがあるし、実際子どもたちの教育というのは、そういう本当に将来を担うような大きなものであるので、それで宇治田原の子どもにいい形になればいいと思うし、そこにかかわっている僕らも責任を感じながらということで、なかなか難しい問題ですけど、何とかいい形になればなというふうに思っているところでございます。

ありがとうございます。

○西谷町長　一つのことをしようと思ったら大変、いろんなご意見がおられるから、十人それぞれ違う、また、それぞれの立場の考えがございますので、それが正解か正解じゃないかということを含めて。

教育部長の説明の中にもありましたけども、基本的な考え方についてというところで理解いただければということでございますけども、私の考えとしては、もう先ほど申し上げましたように、本当に子どもだけのことをやっぱりしっかりと考えてあげるべきで。その他のことは、それはまちづくりの面とか、いろんな私の立場としては、一つの角度だけではなかなか結論は出にくいですから、いろんな角度で考える中で考えていかなければならない部分でございまして、今日いろいろ委員さんからご意見をいただきまして、私は、私なりにもう純粋に小中一貫について、委員さんのそういう方向というのもある程度把握する部分もございますので、そういったところをもう少し私自身も考えてまいりたいと思うところでございます。

小中一貫に関しましてのご意見については、この辺で一度、今回は終了させてもらいますが、次第にございました意見交換ということでございますけれども、意見交換を行っていただけたらなと。この際、何かありましたら。

○山本委員　通学上の安全帯の対策についてでございますが、やはり、上ノ山の方の通学上の問題をちょっとお聞きするものでございます。

○西谷町長　中学生、小学生。

○山本委員　小学生。

○山本委員　ちょっとやはり日が暮れるのが早いという心配があるんで、その辺、親御さんにご負担というか、やっぱりその他、奥山田の問題、湯谷谷の問題、やはりかなり負担が大きいというようなことで、やっぱりちょっとスマホの連絡体制というか、ＧＰＳの連絡体制の構築を全町挙げて考えていただきたいなと思うんですけど。

○西谷町長　どんなものか。事務局が知っておるのか。そういうシステムをやっているところはあるのか。

○黒川教育部長　ちょっと私は存じません。

○山本委員　今、家庭でやっていらっしゃるんですね。

○黒川教育部長　小さな小学生に対しましても、こういう携帯というのは、ＧＰＳを発信するような形で。

○西谷町長　それ、小学校で、携帯持っていけへん、持ってきてへんかな。

○黒川教育部長　電話かけられないんです、かけれないけどかかるという電話があるみたいです。そういうのを持っている小学生の子どもさんはいらっしゃいます。

○西谷町長　高尾はどうしはるの。送り迎えしてはるの。

○黒川教育部長　朝は郷之口のところまで親御さんが送られまして、郷之口の方と一緒に登校。

○西谷町長　郷之口のどこ。

○黒川教育部長　コンビニの前ですね。

○黒川教育部長　コンビニの前まで迎えにきてくれる。セブンイレブン。

○増田教育長　あと、教育委員会も何か安心・安全なシステムについては、またどういう形で配慮をしていくのかということに対してまた改めて検討をさせていただきます。

○西谷町長　じゃ、ほかにないようでございますので、本日賜りましたご意見等々、整理する中で、また次回ということにさせていただきたいなということでございます。

　次回の総合教育会議の開催日時について確認をしていきたいと思いますけれども、事務局より提案を願います。

○清水課長　次回、第２回目の総合教育会議の開催日時についてご提案のほうをさせていただきたいと思います。

　次回につきましては、来月、３月１７日の金曜日、午後３時から、場所としては、ここ、総合文化センター研修室３で開催させていただきたいと思っておりますので、委員の皆様のご予定のほど、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

○田中職務代理　何日になるの。

○清水課長　１７日。

○田中職務代理　改めて文書を。

○久野村総務部長　３時という形で。

○清水課長　よろしゅうございますでしょうか。

○黒川教育部長　すみません、教育委員の皆様方には２時半ということでご案内しているかと思いますけれども、うぐいす幼稚園のほうで催しがございまして、町長、教育長が出席予定という形になってございます。その関係で、２時半ですとちょっと、ばたばたするという形になってしまいますので、３時から、今、事務局のほうからご提案させていただきましたとおり、３時からということで、申しわけございません、時間のほうの訂正のほう、よろしくお願いします。

○田中職務代理　曜日は一緒やで。

○清水課長　３月１７日金曜日、午後３時から研修室３のほうでよろしくお願いしたいと思います。

○西谷町長　そしたら、申し上げますけども、次回は３月１７日午後３時から、ここ、総合文化センターの研修室３において行いますので、よろしくお願いします。

何かほかに連絡しやんなんこと等々はございますか。よろしいですか。

各委員さん、何か。

それでは、委員の皆さんのいろいろなご意見をいただきました。本当にありがとうございます。次回までには、指針もある程度整理しますという中で、また、教育委員会だけでのお話をまた、進める中でいろいろとお話し合いをしていただけたらというふうに思います。

どうぞよろしくお願いを申し上げまして、本日はこれにて終わります。本当にありがとうございました。